

「韓国美術における‘ハン（恨）’

—韓国の固有情緒‘ハン（恨）’や韓国女性美術の中に表れる‘ハン’—

黄禧晶（九州産業大学大学院）

□ 論者が生まれ育った韓国には韓国独特の民族情緒である‘ハン（恨）’が存在する。この‘ハン’は‘恨’という漢字を使っているが、日本でいう‘恨み’とは多く異なる性質を持つ韓国人独特の生まれついたモラルである。‘ハン’は他人への憎しみから生ずるものではなく、わけ知らぬ心の奥底からくる悲しみや痛み的情緒である。このような‘悲’や‘痛’の情緒はほぼ遺伝的に発するものである。‘ハン’はその感情ら（悲や痛）を他人へとぶつけるものではなく、むしろ‘ハン’にはその悲しみの原因は自分自身にあるという考え方が潜んでいる。‘悲’から始まる‘ハン’の情緒は‘諦念’や‘達観’の美学まで含んでいる言葉で説明し切れぬ不思議なものである。韓国民族は‘悲’を愛する民族であると言われている。近年日本にも多く紹介されている‘韓流文化’もこの‘悲’の情緒に訴えているところが非常に大きい。このような‘ハン’は韓国という国の長い歳月にかけての‘抑圧’の歴史と密接な関連があると考えられる。韓国が大陸と海に接している地政学的条件を持っているため、韓国は様々な国から相次いで侵略されてきた悲運の歴史を持つ。その相次ぐ被侵を経験していくうちに愛する者や国を失う悲しみを自然に憶えるようになり、それは‘慢性化された悲しみ’になって韓国人の無意識に染み込みつつあった。いわば‘ハン’は韓国民族の遺伝的トラウマであると言えよう。

□ ‘ハン’はその特性上疎外されがちな、抑圧されがちなところに芽生えかねない。論者はこのような抑圧の象徴である‘ハン’の特性に注目し、また二分法的観点から男性に従属されがちなであった‘女性’におけるハンがどのようなものであるか考察する。論者のジェンダーが‘女性’であることに着目して女性的視線からみる‘ハン’の実体を探ることにする。また男性とは異なる身体的、感性的経験を持つ‘女性の感受性’と‘ハン’を結びつけ、韓国女性美術の中に表れる女性的‘ハン’を考察する。論者は儒教の文化や因習が未だに根強く残っている韓国社会で、‘対象’ではなく‘主体’として立ち上がろうとする女性の視線が‘ハン’の表出として表れる韓国女性美術の例を紹介することで、韓国的情緒ひいては韓国的女性感受性に対する理解を求めているのである。